

斧・片刃石斧・石剣などの各種の大陸系磨製石器も数多く発見されている（写真2—11）。

中期の住居跡は全体的に大きく削平されているものが多く、壁面がまったく残存しないものも目立つが、一五軒前後が確認できる。

貯蔵穴は約一四〇基が検出されているので、

住居跡一軒に対する貯

蔵穴の割合は約九基となり、下稗田遺跡の中期前葉から中葉の時期の割合（七・七基）と近い数値を示す。また、規模の面でも床面の直径が三メートルを超えるような大形のものが見られる点で共通している。地山の土質の硬軟による耐久度やその大きさも考慮する必要があるが、貯蔵穴の数の多さは農業生産への依存度の大きさを示すとともに、収穫量の豊かさを物語るものであろう。

後期の住居跡では四八号住居跡が他とは異なる構造をもつ。柱穴が壁際に配置されていることやベッド状遺構がないことに



写真2—11 黒田エノヲ遺跡出土石器

加えて、特にその規模が通常の二倍の面積をもつことがあげられる。この住居跡は集落の集会所的な施設か、又は首長層の居室ではないかと考えられる。

中期の集落と後期の集落の間に隔絶する時期があったかどうかは今後の詳細な分析が必要であるが、後期には集落が大きく発展したことは確かである。近接する下原出口遺跡と合わせる住居跡は百軒を超えるし、未調査部分も含めるとこれに倍する大集落を構成していたと推定され、京都平野南西部の拠点集落となっていたであろう。

二 久保地区遺跡群

久保地区遺跡群は長峡川の支流である初代川の南側で、久保地区の集落南方に広がる標高三〇〇～五〇〇メートルの台地上に展開する。圃場整備事業に伴って平成六年から八年にかけていくつかの遺跡が発掘調査されている。

大久保今地遺跡

当遺跡は上久保集落の南東側で、標高二八〇メートルの丘陵東側縁辺部に所在する。遺跡全体としては弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡で、方形竪穴住居跡四軒・掘立柱建物跡四棟・貯蔵穴二基などが調査されている。このうち住居跡は土師器や須恵器が出土していることから古墳時代の遺構と考えられ、掘立柱建物跡についても出土遺物からみて鎌倉時代のものであろう。

貯蔵穴は二基とも弥生時代の遺構と考えられる。1号貯蔵穴は調査区の南西部に位置し、他の遺構と切り合うが、方形の平面形を呈する貯蔵穴である(図2-53・1)。大きさは地表面で長さ一・九三メートル・幅一・五六メートルで、床面では長さ一・六五メートル・幅一・四九メートルである。壁面は垂直に近く立ち上がり、床面は平坦で、深さは〇・二二メートルと浅い。床面からは甕が数点出土している。2号貯蔵穴は調査区の西側に位置し、他の小土壙と切り合っている(同・2)。平面形は基本的に隅丸方形をなし、大きさは地表面で長さ一・六八メートル・幅一・三九メートルで、床面では長さ一・三五メートル・幅一・一四メートルである。壁面は開き気味に立ち上がり、床面は平坦で、深さは〇・七六メートルである。埋土中から弥生土器片が出土している。京都平野の弥生時代の貯蔵穴は平面形が円形のものが多いが、当遺跡で確認され

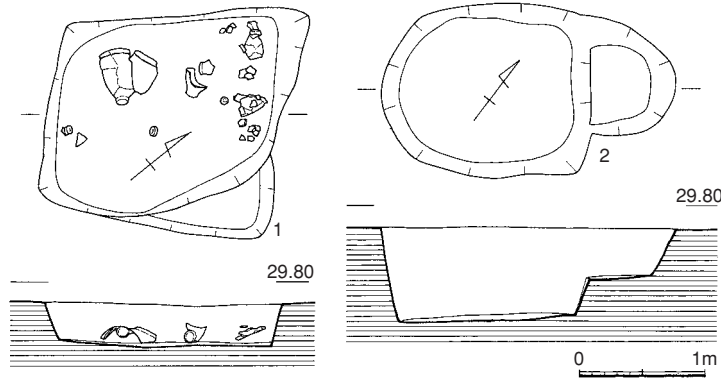


図2-53 大久保今地遺跡の貯蔵穴

た貯蔵穴は二基とも方形に近い平面形をなすことが特徴である。ただし、京都平野の縁辺部や河川の中流域では、犀川町古川平原古墳群の2号貯蔵穴のように方形のものもわずかにみられる。

大久保掘生遺跡

当遺跡は大久保今地遺跡の南東約七〇〇メートルで、標高三八〇・三九メートルの台地東縁部に立地する遺跡である。弥生時代から古墳時代にかけての集落や墓地の一部が調査されており、竪穴住居跡二五軒・掘立柱建物跡九棟・石蓋土壙墓一基・甕棺墓一基・古墳一四基などが確認されている(写真2-12)。これらのうち古墳は古墳時代中期で、石蓋土壙墓も古墳群中に位置することから同時期のものと考えられる。また、掘立柱建物跡についても出土遺物がなく、時期が不明である。ここでは弥生時代後期から古墳時代初頭の時期の竪穴住居跡と甕棺墓について概観する。

竪穴住居跡は24号住居が円形の平面形をなし、前期から中期の遺構と考えられるが、他の住居跡はすべて平面形が方形を呈し後期後半から古墳時代初頭に属するものである(表2-4)。その分布は調査区の中央部から東側に集中し、更に東方や南方の調査区外にも広がっているものと考えられる。

10号住居は調査区南東部に位置する正方形に近い平面形の住居跡である。主軸の長さが五・〇メートル・幅五・四メートルで、床面の深さは〇・二五メートルと標準的な規模の住居跡である。床面の中央に

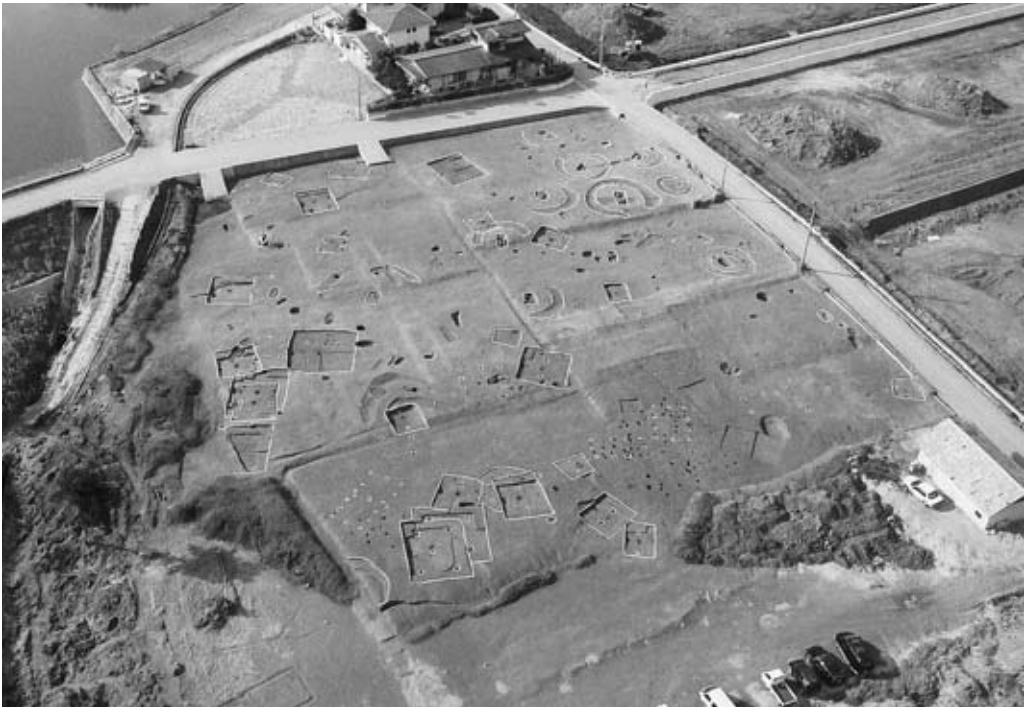


写真2—12 大久保掘生遺跡全景（勝山町教育委員会所蔵）

炉跡があり、その東西両側の約一・〇メートル離れた位置に柱穴が配置されている。南壁の中央部に屋内土壙、東西両壁にはベッド状遺構も遺存している。この住居内からは炭化材が多量に出土していることから、焼失家屋と考えられている。

11号住居は10号住居の北側約七メートルに隣接する平面形が正方形の住居跡である。規模は長さ七・四メートル・幅七・三二メートルと、当遺跡で最大の住居跡である。床面の中央部に径四五センチメートルの炉跡があり、炉跡から四隅に向かって二・二メートル前後離れた位置に主柱穴四本がある。ベッド状遺構は検出されていないが、屋内土壙は南東壁の中央部付近で検出されている。

17号住居は調査区の東隅に位置する平面形が長方形の住居跡である（写真2—13）。主軸の長さが五・六メートルで、幅は七・四メートルをはかる。炉跡が床面中央よりわずかに南西側にあり、主柱穴は四本が長方形に配置されている。ベッド状遺構は北東・北西・南西の壁沿いすべてと、南東壁の一部に付設されており、ベッド状遺構と壁の間には幅二〇センチメートル前後の周溝がめぐらされている。また、西側の主柱穴を発して床面の北側を迂回する小溝が南東壁中央部にある屋内土壙までのびている。

19号住居は17号住居の北西側約二メートルに隣接する平面形が長方形の住居跡である（写真2—13）。規模は長さ四・三五メートル・幅五・七メートルで、床面は〇・四メートルの深さをもつ。主柱穴は炉跡の両側に二本、屋内土壙は南東壁の中央部で検出されている。ベッ

表2—4 大久保掘生遺跡弥生時代住居跡一覧表

遺構番号	住居の平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主柱穴の数	炉跡の有無	ベッド状遺構の有無	屋内土壇の有無	出土遺物	時期
1号	長方形	5.40	7.05	0.35	2	無	有	有	壺・高杯	後期末
2号	長方形	4.46	4.90	0.20	2	有	有	有		
3号	長方形	3.20	2.75	0.10	2	有	不明	無	甕	
4号	長方形	4.45	5.52	0.25	2	有	有	有	壺・甕・鉢・高杯	
5号	長方形	3.70	2.90	0.05	2	有	不明	無	壺	
6号	正方形	3.75	4.10	0.50	2	有	有	有	石庖丁	
7号	長方形	2.70	3.70	0.40	2?	有?	有	有	甕	後期後半
8号	正方形?	3.40	3.35	0.20	不明	有	不明	無		
9号	正方形	5.20	5.70	0.30	2	有	有	有	高杯	
10号	正方形	5.00	5.40	0.25	2	有	有	有	鉢	
11号	正方形	7.40	7.32	0.30	4	有	無	有	甕・高杯・ミニチュア土器	古墳初頭
12号	正方形	4.26	4.45	0.40	2	有	有	有		
13-1号	長方形	5.95	約7	0.35	4	有	有	有	甕・器台	
13-2号	長方形	4.05	6.05	0.40	2	有	有	有		
14号	不明	不明	6.80	0.50	4?	不明	有	不明	甕	
15号	正方形	3.52	3.65	0.50	2	有	有	有	壺・鉢	後期後半?
16号	長方形	4.05	4.60	0.15	2	有	有	有		
17号	長方形	5.60	7.40	0.40	4	有	有	有		
18号	長方形	6.35	7.30	0.25	4	不明	有	不明		
19号	長方形	4.35	5.70	0.40	2	有	有	有	高杯	後期後半
20号	長方形	3.90	4.40	0.35	2	有	有	有	壺・甕・鉢・高杯・器台	後期末
21号	正方形	3.30	3.35	0.05	2	有	不明	有	甕	
22号	正方形	3.05	2.75	0.15	2?	有	不明	無		
23号	長方形	2.70	4.20	0.20	2	有	有	有		
24号	円形	6.00		0.10	5以上	不明	無	無	甕	

ド状遺構は北東壁と南西壁沿いに付設されている。住居内からは炭化材が出土している。

20号住居は19号住居の北側一・五メートルに隣接する長方形の平面形の住居跡である(写真2—13)。規模は長さ三・九メートル・幅四・四メートルとやや小形である。炉跡は床面のやや北側にあり、その東西両側に二本の主柱穴、南壁の中央部に屋内土壇が配置されている。ベッド状遺構は北側と東西両側の三方の壁沿いに付設されている。炉跡付近に集中して土器が出土している。

当遺跡の住居跡には形態上の類型がいくつかあるが、京築地域の弥生時代後期の住居跡と共通するタイプに属するものである。もつとも多いタイプは床面の形態が横方向に長い長方形を呈し、床面の中央に炉跡、その左右に二本の主柱穴が配され、入口側の壁面下に屋内土壇が設置されている。ベッド状遺構は幅一メートル前後で、主柱穴側の壁面沿いに二か所か、入口とは反対側の壁沿いも合わせた三か所に付設されるも

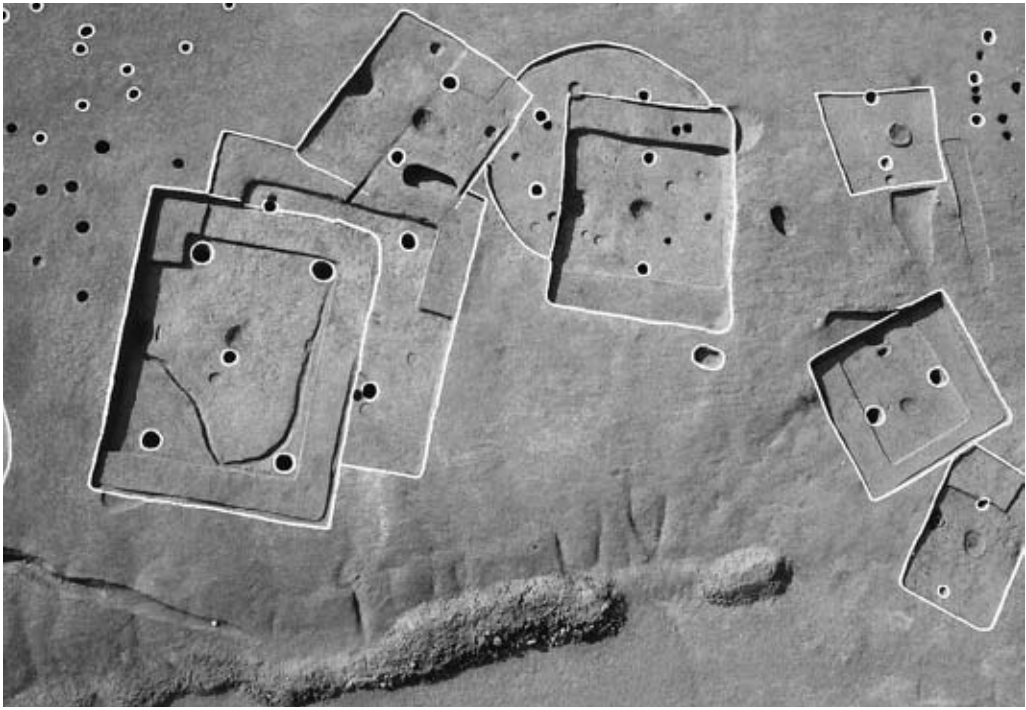


写真 2—13 大久保掘生遺跡の住居跡群（勝山町教育委員会蔵）

のが多い。住居の入口は一部で北東側のものがあるが、大部分は南東側に向いている。住居内から多量の炭化材が出土した焼失家屋と考えられる住居跡が二軒確認されている。

これら弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡からは壺・甕・鉢・高杯・器台・ミニチュア土器などの土器類や石庖丁が出土している。

甕棺墓は調査区東部の19号住居の北側に隣接した場所で発見された。墓壙は長さ〇・七五メートル・幅〇・四五メートルの楕円形の平面形を呈し、床面はほぼ水平である。下側に甕、上側に壺を使用した合わせ口の甕棺で、全長〇・五五メートルの小児用である。下甕の内面からわずかに赤色顔料が検出されている。この甕棺墓は弥生時代終末から古墳時代初頭の時期のものと考えられる。

三 小長川遺跡

小長川遺跡は勝山町のやや北部で、長峽川支流の池田川西岸の低丘陵上に位置する。この低丘陵は長川集落の北方約四〇〇メートルで、北側の加廊戸池と南側の長迫池に挟まれて北西から南東方向にのびている。遺跡は丘陵の先端部の標高四五〜五三メートル付近に立地する。当遺跡の所在地は大字長川字小長川である。

当遺跡は福岡県の遺跡分布図では加廊戸池東遺跡として登録されている遺跡で、弥生時代の甕棺墓群の存在が確認されているものである。また、丘陵北側の崖下面は長川北遺跡の名称で